The Japan Lung Cancer Society

R 63

非根治手術による長期生存例

国立病院九州がんセンター　呼吸器○大田満夫、
飯田彰、植田英彦、真鍋英夫
病理　堀江昭夫、琴尾泰典

非根治手術例で5年以上長期生存の5例を検討した。主腫瘍切除3例、非切除2例である。

非切除の第1例は52才男、昭和39年血痰、41年気管支鏡検査で左肺癌と診断され、某病院で開胸、切除不能で術後放射線照射を10回受けた。5年後胸痛悪化、左腋窩リンパ節転移巣摘出、腺癌であった。胸痛強く、九州がんセンターへ転院、放治7800γ、METT 10回注射、試験開胸以来7年で死亡した。剖検で左肺門型肺癌で局所浸潤が極めて強く、副腎、腎、肝に血行性転移を認めた。組織像はadenoid cystic ca.で、ゆっくり進展する腫瘍と考えられた。

第2例は49才の男、43年息切れ、嗄声を生じ、44年左横隔膜挙上あり。肺癌を疑われ開胸したが、左肺門から縦隔に及ぶ小児手拳大の腫瘤に胸壁播種まであり、試験開胸に終った。試片は九大病理で扁平上皮癌と診断された。47年ベータトロン16回照射、48年胸痛強く、Linacで6000γと化療で軽快。50年8月胸椎転移による下半身不随で再入院。開胸以来6年8月の現在入院加療中である。遠隔転移がなく、緩慢に局所進展のみ行なう癌と思われる。

切除の第1例は69才主婦、43年右上葉切除縦隔リンパ節も腫大し摘出したが、癌細胞は認められなかった。主腫瘍は高分化腺癌であった。4年後左上葉に小陰影、年々増大するので7年後左上葉切除を行ったが、肺内血行散布を既に生じていた。組織は初回同様高分化腺癌で現在外来観察中で元気である。上記3例は、いずれも悪性度の低い癌で進展の遅いため長期生存したと思われる。

残り2例は非治癒的肺剔除例である。共に扁平上皮癌であり、而も術後3回以上の　膿胸を併発した症例である。56才公務員男は右肺門型肺癌兼限局性膿胸で右肺剔除を受け、肺門リンパ節転移陽性であった。術後6年間癌再発の兆はなかったが、8年4月で死因不明で死亡した。55才男漁師は左肺門型肺癌で術前照射を受け左肺剔除を施行された。切除肺血管内に癌浸潤が認められたが、10年後健在である。

これらの2例は術後何回もの膿胸により、細胞性免疫能が賦活されて、残存癌細胞が制圧されたものと思われる。

以上5例の非根治手術後の長期生存例をみると、長期生存には肺癌組織の悪性度が低いことと共に生体の抵抗力、免疫能力が大いに関与していると考えられる。

R 64

非根治手術による長期生存例の検討

長崎大学第1外科
○綾部公懿、柴田紘一郎、武富勝郎、大曲武征、
永野信吉、川崎正名、辻　泰邦
宮崎医科大学第2外科
富田正雄

長崎大学第一外科において昭和30年より51年3月迄に経験した原発性肺癌は265例である。このうち非根治手術にもかかわらず長期生存した症例が2例あるので報告する。

症例1は68才男子で、昭和41年5月25日、血痰、呼吸困難を主訴として当科を受診した。胸部レ線検査で左肺門部に直径7㎝大の腫瘤陰影があり、気管支造影にて左下葉気管支の狭窄及びB_6の中断像がみられた。肺癌の診断で同年6月3日左下葉切除術を施行した。手術時、腫瘍の下行大動脈壁への浸潤があり、非根治手術となつた。組織像は扁平上皮癌であり、気管支肺リンパ節に転移がみとめられた。術後腫瘍の残存した大動脈壁を中心にコバルト3000Rを照射した。術後5年目に死亡したが剖検は行なわれなかつた。

症例2は61才男子で昭和41年5月17日血痰を主訴として当科を受診した。胸部レ線検査上、右中肺野に腫瘤影があり、断層撮影にて後方より6㎝に45×3.7㎝のnotchingを有する腫瘤を認めた。肺癌の診断で同年6月6日右中下葉切除術を施行した。組織像は腺癌でリンパ節転移はみられなかつた。術後2週間目頃より血性漿液性の胸水の貯留をきたすようになり、数回の穿刺をおこなつたが、胸水の病理学的検査でClassⅣの診断をえた。術後肺門、縦隔にコバルト5000Rを照射したが、照射終了時頃より胸水の病理学的検査でClassⅠとなつた。その後しだいに胸水もみとめなくなり同年12月23日に退院した。その後昭和46年9月20日、肺癌の再発により死亡した。

以上2例のうち症例1は大動脈壁の癌腫遺残により又症例2は術中癌性肋膜炎の所見はみられなかつたにもかかわらず術後早期に胸水中に癌細胞のみられたことにより非根治手術例とみなしたものである。いずれも術後放射線照射をうけているが、胸水中の腫瘍細胞の消退からみて、症例2は興味深い経過であつた。

NII-Electronic Library Service